

青春BUILDプロジェクト「写真展 高校生が写真・文字で映し出す建設の世界」開催
 高校生のまなざしで切り取る、建設業の写真と言葉



仕事の重みをレンズ越しに見た生徒たち（福岡第2合同庁舎ロビーにて）

普通科に通う高校生が、土木の現場写真を撮影して、その魅力を伝える写真展「高校生が写真・文字で映し出す建設の世界」が30日、九州地方整備局の入る福岡第2合同庁舎1階ロビー（福岡市博多区）で開かれた。主催は「デミー博士」のニックネームで知られる土木学者の出水亨氏が代表を務める「青春BUILDプロジェクト」。土木の世界に触れる機会が少ない高校生に、写真を通して業界に関心を持ってもらうきっかけ作りとして取り組んでいるもの。九州地方整備局をはじめとする行政機関、地域建設関連各社などの協力を得て進めている。

写真展のあいさつで、デミー博士は「建設業の人手不足は、私たち市民の命と暮らしを支える基盤が揺らぐ深刻な問題」と危機感を伝え、「土木に馴染みのない若者の驚きや発見には、関係者が気づかない魅力がある。彼らのまなざしを通して、より多くの人に建設業を知ってほしい」とあいさつ。今回は新たな試みとして、本明川ダムなどの工事現場に加え、長崎河川国道事務所や建設コンサルタンツのオフィス内部も撮影取材。インフラを「作る工事」だけでなく、それを計画し「支えるオフィス」の両面を高校生の視点で映し出した。



垣下局長（左）とデミー博士（右）

会場には長崎県立諫早高校、福岡県立折尾高校、福岡大学附属若葉高校の生徒による写真54点、短歌10点が展示。セレモニーに参加した諫早高校（諫早市）の生徒からは「現場を見て、土木の印象が180度変わった」、「土木に関しては漠然としたイメージしかなかったが、現場に行くことで携わる人の熱量が伝わってきた」といった声が上がった。また、「VRなど高度な技術を使っても、仲間との対話がなければ成り立たない仕事だと感じた」と、強いまなざしで語った。



コメントを述べる安部社長

撮影に協力した扇精工コンサルタンツ（株）の安部清美社長は「デスクワークの緊張感まで、仕事に真摯に取り組む社員の姿を撮ってもらった。私たち自身も仕事に対する誇りを再確認する機会となった」と振り返る。

九州地方整備局の垣下禎裕局長は「インフラに携わる人々の姿を、未来を見通すような視点で切り取っていただいた。写真や短歌、どれも非常に印象深く、強いメッセージ性を感じました。日々業務にあたっている我々自身にとっても、初心を思い起こさせてくれる素晴らしい機会になった」と話した。

式典の最後には、地元企業の協賛により制作され、長崎県内の高校生約8,000人に配布予定の作品冊子「未知の世界」や、文学部の小説、ポスターなどが同局へ寄贈された。写真展は3月30日（月）～4月28日（火）まで（土日祝日を除く9時から18時、最終日は14時まで）。同フロアでは発生から10年を迎える熊本震災の記憶をつなぐ写真も併催されている。

作品を出展した学校は以下の通り（順不同）

▽長崎県立諫早高校写真部（15名24作品）・文学部（5名短歌10作品）、福岡県立折尾高等学校写真部（17名17作品）、福岡大学附属若葉高等学校写真部（13名13作品）